アーツ前橋
ARTS MAEBASHI
アーツ前橋の情報誌
アンドアーツ

&Arts

第13号
TAKE FREE ¥0

場所に結び付けられる身体と記憶

ARTIST'S VIEW / インタビュー
ダンスカンパニー ときかたち 主宰 **尾花藍子**
OBANA AIKO

特集「蔵を辿れば、まちの歴史が見えてくる」

アーティストコラム 菊池敏正

Photo: 上原ミワ

アーティストが見た前橋

ARTIST'S VIEW

ダンスカンパニー ときかたち 尾花藍子
OBANA AIKO

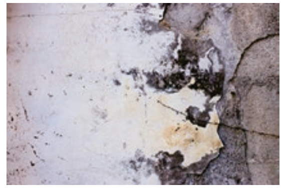
〈ときかたち〉のメンバーが滞在中に訪れた場所で撮影したスナップ。

1 上毛線　生活のすぐそこ（安藤）

2 雨が降っていました。（メル）

3 「立ち入り禁止」区域が多いかもしれない（尾花）

4 昭和の建物と新しい広場（尾花）


5 積み重なった絵画（尾花）

6 前橋を生きる人たち（尾花）

INTERVIEW

空間というキャンバスを彩る身体という絵の具

SPACE AS CANVAS, BODY AS PAINTS.

〈場〉と〈身体〉、〈表現者〉と〈観客〉との「間（あわい）」にあるものを探りながら、絵画的とも演劇的ともいえる、ダンスの枠を超えた作品へと昇華させる〈ダンスカンパニー ときかたち〉。今回、アーツ前橋の滞在制作プログラムとしては初の、身体表現を行うグループとして参加する〈ときかたち〉主宰の尾花藍子さんに、作品への取り組みや、前橋での活動に至った経緯について聞いた。

聞き手：遠藤千尋

ー2017年10月に「前橋市芸術文化れんが蔵」で行った公演『路を辿る』について、開催に至った経緯をお聞きしたいのですが。

ダンサーだけでなく、観客も一緒に身体や空間を共有するための場、その枠組み自体を作るような長期プロジェクトをやりたいと思ったことがきっかけでした。そこから、「前橋市芸術文化れんが蔵」という魅力的な場所にたまたま出会い、１週間の滞在制作と公演をすることが決まったんです。偶然にも、メンバーの安藤暁子が群馬県出身であることもきっかけになりました。もともと、観客の身体をどう環境に感応させるかということには意識的でしたが、劇場で公演をして観客を呼ぶだけではなく、観客の生活環境からその場所へ来るまでの距離も作品の一部になるようなものを作ろうと思いました。

ー実際、観客とどのようなやりとりをしたんですか？

会場に足を運ぶまでの間、１週間ごとに合計３通の

手紙を送り、手紙の内容についてのインタビューを行いました。また、それを随時作品制作にも反映させていきました。プロジェクトメンバーと観客が共に作品を作ることをコンセプトに、お互いの関係を築きながら、演者と観客の境界を無くそうとしました。会場では自由にリラックスした状態でいてもらって、自分がダンサーを見ているのか、ぼーっとしているのか分からない中間領域にいて、自分を内観するような時間と空間を共有してもらえるような場つくりを目指しました。終わった後にも一か月ほどやりとりをしたので、最後まで「観客」という一つの役として参加してもらい、一緒に作品を作ったような感覚でした。

ープロジェクトの制作にあたって、どんなことを大切にしていますか？

言語化するのがとても難しいのですが、「環境に振り付けられる身体」ということをベースコンセプトにしていて、現在の環境や過去の記憶と向き合った時に、自分の身体や直感が感応するポイントを出発点にすることを大切にしています。ここでいう「環境」は、自分の身体の周りにある全てのことで、周りの環境と自分との間に感じる違和感を膨らませたり、尖らせたりして抽象化したものを作品にしています。

ー他に、作品をつくるプロセスで意識していることは？

歩く・座る・立つ・走るなどの基本動作だけで、いかに舞台に上がれるかということを意識しています。初期の作品では動きが多かったのですが、その場所性とダンサーの身体性をより浮かび上がらせるには、絶対にこれだという最低限の動きを積み上げていく方がよりビビットに感じられると考えています。よくダン

Photo: 上原ミワ

サーには、「その場にどう立つか」を自身に問うことに重点を置いてもらっていて、大げさに聞こえるかもしれませんが、その一歩で世界を動かして欲しいという気持ちがあります。

ー尾花さんは個人でも作品を発表されていますが、〈ときかたち〉で活動する時との違いは？

私一人の時はまず、自分自身の人生や辿ってきた道のりを、場に感応させることに重きを置いて作品を作るのですが、〈ときかたち〉ではさらに、寄り集まったメンバーの実感や問題意識を取り入れるようにしています。そうすることで、より作品に多様性が生まれると考えています。

ー〈ときかたち〉の作品には、演劇など、コンテンポラリーダンス以外の要素も感じました。他のジャンルから影響を受けることはありますか？

生きている中で無意識に影響を受けてはいると思いますが、あまりジャンルは意識していません。その時に表現したいものが、既存のジャンルではたまたま表現しづらく模索した結果、どのジャンルでもある／ない作品になることが多いです。いままでは、自ら積極的にジャンルを名乗ってきませんでしたが、これからは、ジャンルに囚われない身体表現全般を、ダンスと呼んでいくと面白いんじゃないかなと考えています。「ダンスカンパニー」という言葉をあえて〈ときかたち〉に付けることで、そういった提示をしていきたいです。

ー尾花さんが運営しているシェアハウス＆スタジオ〈LAB83〉は、どのような場所なのでしょうか？

〈LAB83〉は自分の舞台作品を育ててくれた場所だと思います。絵画では絵の具を取り扱いますが、ダン

2017年10月に公演を行った「前橋市芸術文化れんが蔵」。三河町にある酒蔵だった建物を改装し、イベントや演劇など多目的利用に向け整備されている。建設当時のままの柱や梁が残された広々とした内部は歴史を感じる独特な空間。

アサヒ・アート・フェスティバル　コザクロッシング 2013
沖縄黒人街ツアー型作品『風と朝と夜。』
@コザ銀天街、照屋公園、黒人街廃墟／沖縄県　2013 年
Photo:Toyozato Tomoyuki

沖縄市コザに１か月間滞在。沖縄の歴史深い場所、コザ黒人街の現在と歴史のリサーチを経て、参加者とともに会場を移動しながら街の景色とパフォーマンスを体験するツアー型プログラムを行った。

ス作品で取り扱うのは生身の身体そのものです。なので、ダンス作品を作る時も、絵の具と向き合うようにダンサーと向き合い続けたいと思い、衣食住を共にする考えが浮かびました。若手ダンサーを中心としたアーティストたちと暮らしを共にしながら作品制作をしたのですが、結果、生活と創作に垣根がなくなり、現代社会とは切り離された共同体になったことで、舞台上でダンサー同士が触発し合う関係性が見えやすくなったように思います。でも近年は、シェアハウスでの制作からアーティスト・イン・レジデンスでの制作へと切り替わってきました。シェアハウスの場合、ダンサー同士の一体感はすごく強まるのですが、さらに「環境に振り付けられる身体」にフォーカスを当てようと思った時に、全員で異なる場所へ行き、一定期間住む創作スタイルが合っているのではないかと考えたためです。

ー沖縄市コザで制作した作品『風と朝と夜。』では、場所と作品との密接な繋がりを感じました。

この作品は、〈ときかたち〉を立ち上げる前の尾花個人の作品ですが、今大切にしている「環境に振り付けられる身体」の原点になったと思っています。１か月の滞在制作の間に黒人街の廃墟に出会い、この場所と一緒に踊りたいと感じたことがきっかけで、最終的には私以外は全て地元の市民の方たちと場所だけで作品を作りました。これ以来も、このような場所ありきの制作というのは意識していましたが、主軸ではなかったように思います。最近になって「これが〈ときかたち〉でやりたかったことなのかも」と思うようになりました。

ー今回の滞在制作ではどのようなことをしたいと考えていますか？

〈ときかたち〉がアーツ前橋の滞在制作で初めての身体表現を行うグループでの招聘であるということを生かして、身体を使って沢山の人と出会えるようなリサーチをしたいとメンバーと話をしています。例えば、ダンスに馴染みがある人と、そうでない人の両方と交流できるようなパブリックイベントを企画したりとか。その時は、ぜひ多くの方に来て頂けたら嬉しいです。

ー〈ときかたち〉のような身体表現を扱う作品を体感する時、どういった姿勢で臨めば、より楽しむことが出来るでしょうか？

自由に体感していただくのが一番ですが、身体表現に馴染みのない方にとっては、わかりづらいものかもしれません。けれど、わかりづらいものと向き合ってみることで「わからないものに、どうにか寄り添ってみる」という体験ができるチャンスかもしれないなと思います。日常生活でもなかなかできないけど、そういった力は大切なものなのではないでしょうか。自分で何らかの身体表現を実際にやってみるのもいいかも。ダンサーがどのような気持ちや感覚でその場にいて身体を動かしているのかをよくみて、感じて、自分の記憶や現在の状況と自由に重ねたりしてみると、自分の身体を見つめることにも繋がり、いつもとは違った新しい感覚の発見になるかもしれません。

ダンスカンパニー ときかたち
パブリックプログラム
2018年３月17日（土）、18日（日）
前橋市芸術文化れんが蔵、竪町スタジオ（予定）
＊詳細はアーツ前橋公式サイトをご覧ください。

OBANA AIKO
尾花藍子

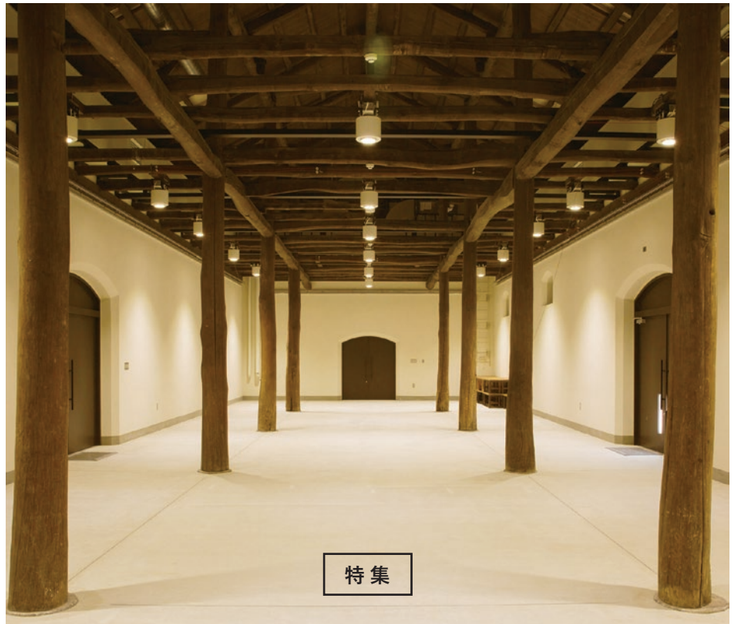
東京都出身 東京都在住。ダンスカンパニー ときかたち主宰。シェアハウス＆スタジオ〈LAB83〉代表。美大絵画学科卒業後、身体を使った行為表現を路上で始める。美術・プロジェクト作品発表を経て、近年は主に振付家・演出家として活動。「環境に振り付けられる身体」を軸に、文化的背景を内包した様々な「場」で作品を創作。各々の表現媒体の特徴を活かしながら、表現や思考の可能性の幅を広げる活動を展開している。若手演出家コンクール 2014 ノミネート。横浜ダンスコレクション 2016 コンペティションⅠファイナリスト。

前橋刑務所

1888（明治21）年に建設され、かつて「前橋監獄」と呼ばれた前橋刑務所。1889年にかけて整備された、敷地をぐるっと一周するレンガ積みの塀には、建設時のレンガが今も使われており、当時の面影や痕跡を残しています。

使用されている約170万個のレンガの中からは、刑務所で作られたレンガの証である桜花章が刻印されたものも発見されました。

当時のまちの技術や文化度を表すものとして、細やかな意匠が施されたレンガ造りの外観は、前橋出身の詩人・萩原朔太郎の詩に登場しただけでなく、近年では、近代的な監獄のイメージにふさわしいなどの理由から、映画のロケーションにもたびたび使用されています。



特集

「蔵」を辿れば、まちの歴史が見えてくる

今回アーツ前橋で滞在制作をするダンスカンパニーときかたちが、2017年10月にパフォーマンスを行った「前橋市芸術文化れんが蔵」をはじめ、前橋のまちを歩いていると、重厚なレンガ造りの蔵を見かけます。その光景は私たちに、まるでそこだけ時間が止まってしまったかのような不思議な感覚を与えますが、前橋にこのようなレンガ蔵が多く残っているのは一体なぜなのでしょうか？ その答えは、前橋がかつて生糸のまちとして栄えた歴史にあるようです。明治、大正、昭和と、時代に合わせて少しずつ変化し、今も前橋のまちに寄り添うように存在するレンガ蔵。その歴史を探ってみました。

1 前橋市芸術文化れんが蔵（旧大竹酒造煉瓦倉庫）

1923（大正12）年　煉瓦造2階建、瓦葺
所在地：前橋市三河町1丁目16-27

1923年に造り酒屋の曽田軍平が醸造蔵として建造。その年に起こった関東大震災の揺れにも耐え、現在もその姿を残している。1932年から1972年までは大竹酒造の醸造蔵として3代に渡り使われていた。2013年に前橋市が保存・活用を目的に購入し、2014年に内部の柱はそのまま残す形で耐震補強、照明設備などの工事をし、文化施設としての活用が始まった。同年、国登録有形文化財に指定されている。

2階の床板は取り外されているが、元は1階に酒造桶を並べて仕込みを行い、2階で酒母造りの作業が行われていた。外壁は赤レンガと黒レンガ（焼過レンガ）の組み合わせによる凝った意匠がなされている反面、内部空間は丸太の梁や柱が張り巡らされた和風建築の趣。演劇やライブ、展示会など、様々な用途に利用されている。

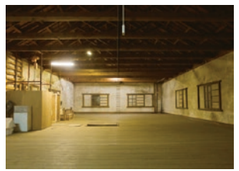
入り口のアーチ中央には要石を模した黒レンガの意匠が見られるなど、凝った外観となっている。内部には建設当時の梁や柱が残る。

2 旧安田銀行担保倉庫

1913（大正2）年　煉瓦造2階建、瓦葺
所在地：前橋市住吉町2丁目10-2

今号の表紙の撮影を行った旧安田銀行担保倉庫は、1913年に「群馬商業銀行前橋支店細ヶ澤出張所」として建設された。銀行の担保物件として集められた生糸や繭の保管庫としての役割を持ち、繭の乾燥場として当時最新式の機能を備えていた。その後、群馬商業銀行は1916年に同じ安田系の「明治商業銀行」になり、1923年に他の10銀行と合併して「安田銀行」に改称。現在は協同組合前橋商品市場の管理のもと、一般倉庫として使われている。2004年「近代の地域経済を物語る巨大な煉瓦蔵倉庫」として、国登録有形文化財に指定された。

倉庫内は木造で、柱や梁にはヒノキや杉が使用され、内壁には漆喰が塗られている。屋根はキングポストトラスという構造で支えられ、2階部分は柱が一本もない空間になっている。



2階には荷揚げに使った床の穴や滑車などが残されている。外壁は「覆輪目地(ふくりんめじ)」と呼ばれる珍しい仕上げが施されている。

3 上毛倉庫

1896（明治29）年　煉瓦造2階建、瓦葺
所在地：前橋市表町2丁目25-17

上毛倉庫は、前橋が生糸のまちとして栄えた1895年に創立した。創立者の江原芳平は、製糸工場「天原社」を設立し、前橋の生糸産業の発展に寄与した人物。当時の前橋は製糸業の隆盛を受け、三十九銀行や横浜銀行（第二銀行）などの金融機関が進出。担保となる繭や生糸の取扱量が次第に増えていったため、大規模な倉庫が必要となり、上毛倉庫も三十九銀行の担保を保管するための関連会社として創設された。

かつては若宮町にもレンガ倉庫があり（現・クラシード若宮）、前橋乾繭取引所での繭の取り引きが終了する1998年頃までは繭を保管していたという。

現存する表町のレンガ倉庫は2棟。開業当初からあるレンガ倉庫は、前橋空襲の際にも焼け残り、床や屋根を修復して再建した。

外壁に見られるL字形の「折釘」は、補修の際に梯子をかけるなどの目的で埋め込まれている。黒ずんだ煤の跡が歴史を感じさせる。

4 箸蔵（ちょっくら）（旧勝山社煉瓦倉庫）

1902（明治35）年　煉瓦造2階建、瓦葺
所在地：前橋市本町2丁目3-5

1902年、製糸業・織物業を営んでいた「勝山社」の保管倉庫として建造された。勝山社は生糸商人の勝山宗三郎が1878年に本町で創設した製糸工場で、1898年には製糸業から織物業へ事業を転じている。その後、銀行の担保倉庫や書物庫として利用され、近年では内部の改装や出入り口の新設を経て、カフェや居酒屋などの飲食店として利用されている。2008年、国登録有形文化財に指定された。もとは敷地内の別の場所にあったものを昭和の頃に基礎ごと持ち上げて移設したらしい、と教えてくれたのは、現在この場所で「和食ダイニング 箸蔵」を経営する店長の小室瞬介さん。たまたまそこを歩いていて、空き店舗になっていたこの建物を見つけたという。国道50号から一歩入った路地にひっそりと立つ、隠れ家的な人気店。

総黒レンガの外壁は重厚な窓の造りと相まって独特な存在感を放っている。店内の壁にもレンガが露出している。

協力：上毛倉庫株式会社、協同組合前橋商品市場、上州文化ラボ、和食ダイニング箸蔵、前橋市役所文化国際課
参考文献：『上毛倉庫120年誌』上毛倉庫，2015年、『前橋歴史遺産双六』上州文化ラボ編，2015年

「お気に入りの古道具」菊池敏正

骨董と呼べる程の物ではないが古道具の類を蚤の市で見つけると、衝動的に買ってしまう事がある。それらは実際に使う為に購入するのではなく、単純に道具の形状が気に入っているだけであり、鑑賞のためのオブジェのような感覚である。外国に出かけた時などはアンティークマーケットに出向き、用途のわからない古道具を眺めては、気に入ったものを見つけ出し購入することもある。もちろん私が手に入れることのできる程のものなので、さほど珍しいものや高価なものではない。特に昨年は長期間イギリスに滞在していたこともあり、休日になると時間を見つけては色々なマーケットに出向いた。私はもっぱら銀食器や家具など高級な品を扱うマーケットではなく、雑多な日用品やガラクタを扱うマーケットばかり回っていたが、そこで土中から掘り出しただけであろう物を扱う店を発見した。並べてある品は、割れた陶器やガラス、空き缶等があり、いささかユニークな品揃えに目を奪われた。近づいてみると、そこに古い喫煙用パイプ（素焼きの陶器製）の残骸をアイスクリームの空箱に入れて売っており、値段を聞くと一つ 70 円とのこと。そこで店主の老婆との価格交渉の末、まとめて購入することで、箱に入っている物全てを 2000 円程で買うことにした。元々、壊れているので日本に持ち帰る際も、何も気にせずトランクに詰め込み持ち帰ったが、改めて眺めてみると残念ながらガラクタの感じは否めない。あの時に何故、箱ごと欲しくなったのかは思い出せないが、このような用途を持つ形には、どこか洗練された印象もあり、眺めていて心地の良い時がある。また、そういった物と近代美術の関係性を自分なりに想像してみることも楽しみの一つである。

菊池敏正（きくち・としまさ）

1979年 愛媛県生まれ。2008年 東京芸術大学大学院文化財保存学保存修復彫刻専攻博士課程修了。主な個展に 2012年「Neo Authentic」（Showcase MEGUMI OGITA GALLERY、東京）、2016年「対峙する客体 - 形態の調和と造形 -」（POLA MUSEUM ANNEX、東京）など。近年では2017年「Lustrous Surfaces」（ヴィクトリア＆アルバート博物館、ロンドン）。2018年 3月から開催する「Art Meets 05 菊池敏正／馬場恵」（アーツ前橋）に出品。

滞在制作アイディア

滞在中には実現しなかったけれども、前橋のまちなかに滞在したからこそ生まれたアイデアを紹介します。

ARTIST

木村崇人 KIMURA Takahito

滞在期間：73日間
2015年8月1日〜9月6日
2016年1月10日〜2月17日

● 風見鶏の作品を アーツ前橋のファサードに設置

パンチングメタルの一つ一つに小さな風見鶏を設置して、風が吹くと一斉に同じ方向を向き、全体で一枚の大きな鳥になる。

● 鹿を使いこなす

鹿一頭をまるごと使って、食べるための環境を作る。肉は料理に、革はイスに、骨は食器に、など一頭まるまる使って生命を食べるような試み。

● 木漏れ陽プロジェクト室内編

室内用の木漏れ陽照明装置を作り、室内で木漏れ陽プロジェクトをやる。

アーツ前橋では、平成 28 年度に 64 点の作品を新たに収蔵しました。前橋市がこれまでに収蔵してきた作品は約 710 点になります。これらの美術作品は、市民にとって大切な宝ものであり、未来へ残して伝えていく贈り物です。ここでは収蔵作品と作家を紹介します。

前橋の記憶を想起せよ

白川昌生《サチ子の夢》
SHIRAKAWA Yoshio *“Sachiko’s Dream”*
2002（平成 14）年／アクリル、キャンバス、
ゼラチンシルバープリント、布、ボディ／平成 26 年度購入

白川昌生は、アーツ前橋で最初に個展を開催した作家です。北九州出身の白川は1970年に渡欧、13年間の滞欧生活を経て、1983年に帰国する際に、白根開善学校高等部の美術教員の職を得たことをきっかけに群馬に住み始めました。現在も、大胡町にアトリエを構え、精力的に作品を発表しています。また、昨年の群馬県立近代美術館における「群馬の美術2017　地域社会における現代美術の居場所」展で、白川の「群馬県朝鮮人強制連行追悼碑」に関する作品撤去問題が話題となり、名前を知った方も多いのではないでしょうか。「彫刻は忘却の手前に立っている標識」と著書に書いているように、白川にとっての作品とは時間の経過と共に歴史の中で忘却されてしまう、さまざまな記憶を想起するための装置として機能します。

本作品も、前橋という街の記憶と強く結びつく作品です。変貌し、衰退してゆく街の姿を鋭い視線でつぶさに観察し、前橋に実際に住んでいたファッション・デザイナーの話を再構成しながら、個人の体験を一つの時代の記憶として提示しています。1950年代から1960年代の前橋におけるファッションを巡る熱気を当時の記録写真を使用しながら再現し、1990年代に空洞化した前橋の商店街に佇む若い女性の肖像を象徴的に配することで、ある個人の夢をフィクショナルに語ろうとします。個人が歩んだ人生の軌跡を再構成し、それを生み出した時代の社会や制度を想起させることで、無名の存在である個人が時代の証人になるのです。

TOPIC

石坂亥士・山賀ざくろ × 特別養護老人ホームえいめい

「森」の続きで見つけた「玉手箱」

2016年の夏に開催した「表現の森　協働としてのアート」展の継続事業として、本年度より「えいめい音の玉手箱」と題し、石坂亥士（神楽太鼓奏者）と山賀ざくろ（ダンサー）は、特別養護老人ホームえいめいに入居しているお年寄りの皆さんと1か月半に1回交流しています。

当日はあいさつや説明は特にせず、おやつ後の時間に広いホールに座っている70名ほどのお年寄りたちの間へ、打楽器の音やダンサーが入ってきたら始まりです。一緒に打楽器を鳴らしたり、手拍子をしたり、体をゆすったりよじったり、目でダンサーの動きを追ったり、耳をふさいだりすましたり、はたまた音をものともせずにぐっすりと寝たり一様々なリアクションがお年寄りの皆さんからも生まれています。昔のお祭りやご自身の出身地の楽器のお話をしてくださる方もいて、リズムによって過去の記憶も引き出されているようです。施設のスタッフさんの中には、楽器をずっと振ったり、笑っていたりするお年寄りの様子を見て、普段との様子の違いに驚いている方も。45分ほどテーブルごとのグループや1人ひとりの反応を見つけてはセッション。施設のスタッフさんが様子を見ながらトイレなどの介助へ移り、自然とリズムが終息していきます。施設の日常に寄り添いながらも、何に出会うかわからない「森」の続きでもあり、開けるとどうなるのか分からない「玉手箱」でもある本プロジェクトの様子は、表現の森特設サイトで報告しています。

https://www.artsmaebashi.jp/FoE/

まえばしぶんか探索隊

うしろまえばし

「うしろまえばし」はアーツ前橋のアートスクール受講生が立ち上げたプロジェクト。街を歩いて気になるものをアーカイブしていきます。活動はFacebookでチェック！

https://www.facebook.com/ushiromaebashi/

「ようこそ、こけしのまちへ」

群馬総社駅の近くに立っている看板。
絶妙なセンスですね。
前橋はこけしのまちでもあります。

まえばし COLLECTORS FILE #10

コレクターズ・ファイル

街の人が集めているものを紹介してもらうコーナー。
それがなんであれ、好きならば集めてしまうのが人というもの。
集めればそこに新たなる美が宿る？

小さい頃になかなか遊ばせて貰えなかった思い出があり、その反動や懐かしさから集め始めました。家の近くのリサイクルショップや秋葉原にある専門店などでよく購入します。お気に入りのソフトは、リアルタイムでも一番よく遊んだ『マリオペイント』。スーパーファミコンに専用マウスを繋いで絵を描くソフトなのですが、当時パソコンでもあまり普及していなかったマウスを、ゲーム機に挿して遊ぶというのがかなり革新的でしたね。

13 COFFEE ROASTERS
五十嵐達郎さん

情報求む！ 前橋で「こんな面白いモノを集めている人がいる！」という情報があればアンドアーツまでお寄せください。

EVENT まちなかイベント情報

「すみれのオープンラウンジ」
2018 年 3 月 8 日［木］ 18:00 - 23:00
創業カフェ ムーちゃん　前橋市創業センター 1F
お料理を食べながら、ポップス尺八奏者すみれさんの演奏が聴けます。
ムーちゃん特製の一品料理とつまみ類を提供。定員 15 名、会費 3,000 円（要予約）

「第二十四回弁天通り大七寄席」
2018 年 3 月 10 日［土］ 第一部 開演 13:30 ／第二部 開演 16:30
弁天通り、(有)大七茶舗二階
江戸っ子の乱暴者をたしなめる滑稽噺「天災」と、医者と役者の出会いが生んだ名作「名医と名優」でお楽しみください。定員 40 名、料金 2,500 円

「第 8 回うたごえ広場」
2018 年 3 月 11 日［日］ 開場 13:30 開演 14:00
前橋文学館ホール
今回の出演は、ソプラノの朝倉美幸さん、内田もと海さん、吉田早苗さんとピアノの石渡由恭さんです。全席自由席 1500 円

今月のおすすめ by アーツ前橋ショップ mina

ハンカチ専門店の H TOKYO と、京都の福祉施設 NPO 法人スウィングがコラボレーションして生まれた京都ハンカチ(1,944 円)。「京都っぽい」(ピンク / ネイビー)、「モーニング」、「英数字」の 3 種類展開です。

EXHIBITION アーツ前橋 展覧会情報

横堀角次郎と仲間たち
草土社の細密画から、郷里赤城山の風景まで

2018 年 3 月 17 日［土］- 5 月 29 日［火］
開館時間：11:00 - 19:00（入場は 18:30 まで）
会　　場：アーツ前橋　地下ギャラリー
休 館 日：水曜日、(3 月 21 日は開館し、翌日休館)
観 覧 料：一般 500 円、学生・65 歳以上・団体 (10 名以上) 300 円、高校生以下無料

横堀角次郎《赤城山》1960 年　個人蔵

群馬県勢多郡大胡町（現・前橋市）に生まれた画家・横堀角次郎 (1887-1978) は、17 歳で上京し、岸田劉生との出会いによって画家としての人生を歩み始めます。岸田の薫陶を受け、同時代の画家たちと交わりながら穏健な自然描写に徹した作品を発表しました。横堀は群馬との結びつきを大切にし、毎年のように郷里に帰っては幾度となく赤城山の田園風景を描きました。それらの風景画は、対象を前にして描くひたむきな制作態度から生まれたものです。画家の中川一政は彼を評して「君の絵は血が通って暖かかった」と述べました。地元では「角さん」と呼ばれて慕われ続けた横堀角次郎。2017 年に生誕 120 年を迎え、2018 年は没後 40 年の節目の年となります。本展では、100 点を超える横堀の作品と、共に歩んだ仲間たち 21 人の作品を交え、画業の全貌をご紹介します。

※関連イベントや展覧会詳細は公式サイトをご覧ください。

同時期開催

「Art Meets 05　菊池敏正／馬場恵」

2018 年 3 月 17 日［土］- 5 月 29 日［火］
開館時間：11:00 - 19:00（入場は 18:30 まで）
会　　場：アーツ前橋　1F ギャラリー
休 館 日：水曜日（3 月 21 日は開館し、翌日休館）
観 覧 料：無料
主　　催：アーツ前橋

&Arts ISSUE 13 アンドアーツ 第 13 号
発行：平成 30 年 2 月 28 日　企画・発行：アーツ前橋　制作コーディネート・編集：一般社団法人前橋まちなかエージェンシー
ライター：遠藤千尋　アートディレクション・デザイン：殿岡 渉（あしか図案）　写真：上原ミワ
アーツ前橋　〒371-0022　群馬県前橋市千代田町 5-1-16　TEL：027-230-1144　FAX：027-232-2016　www.artsmaebashi.jp